



## ニホンカワウソ

今や、まぼろしの動物というイメージになってしまったニホンカワウソ。一九八六年に高知県の土佐清水市で死体が発見されたのを最後に、姿を確認できない状態が続いている。それでも時折足跡が発見されるというニュースなどもあり、高知県から委嘱されているカワウソ調査員の方々による調査にくわえ、環境庁も調査を委託してカワウソ生息のてがかりを探している。

昔話の中ではおなじみでも、河川の護岸工事などですみかをおわれ、私たちのくらしからはすっかり遠のいてしまったニホンカワウソ。ひつそりと、ひとつのみの野生動物が姿を消してしまうかもしれない。

動物写真家として多くの動物を撮り続けている田中光常さんも、カワウソを撮影したのは一九六五年（昭和四〇年）一二月ごろに愛媛県御荘で撮影したこの一点だけとのこと。昨年環境庁から発表された、絶滅の恐れのある野生動物リストである「レッドデータブック」では、絶滅危惧種（絶滅の危機にひんしている種）にあげられている。特別天然記念物。

（撮影 田中光常）



## 「種」が消えてゆくことの意味 小原秀雄

生物の進化史は、「種」の絶滅史であるといえるほど、数多くの種が生まれて死ぬ、つまり“絶滅”してきました。しかし、それにもかかわらず、1万3000種以上の鳥獣を含め、今日地球上には300万種以上の生物が生きています。最近は3000万種ともいわれています。地史的な時間でいえば、この現生の鳥獣その他の生物種にとっても、絶滅は運命なのでしょう。

「それなら、現在危機にさらされているような、絶滅する動物は絶滅するにまかせればよい」という人もいますが、これは時間のスケールを考えない暴論です。しかも過去には、子孫を残さない真の絶滅ばかりでなく、基本的には別属の種に進化して子孫種を残しての「絶滅」であったのです。なによりも人類が舞台を支配するようになる前と後の地球の違いに目をつぶった議論といえます。人間もどうせ滅亡するのだから、自然破壊もしようがないという考え方もあるでしょうが、ヒトの絶滅自体「自然な」ものではなく、急速な絶滅は人為的なものなのです。その影響を受ける野生動物も、その仕組みはけっして「自然な」ものではないからです。

人類の出現は直接間接に、動物の種の生存・種の維持に影響を与えました。特にいくつもの種の人為的な絶滅と家畜や作物の出現、それに都市生態系に代表される人工の生態系をつくりだしてきたこと。ひいてはそれが増大拡大して地球の生物圏に全体的影響を及ぼしはじめたことで、各地の生物の世界の再編成が始まったのです。それが進んだのが、大規模な絶滅を起こす最大の要因でした。

かつては、「日本でオオカミやトキが滅びて、なんらかの支障が生じたか?」と言った人もいましたし、現在でも、野生動物保護は人間が「豊かになること」の反対と見る人が多いのも事実です。「人

間か、野生動物か」、「人間生活と自然保護のどちらが大切か」といった議論を相変わらず見かけるのも、そういった見方によるものと思います。

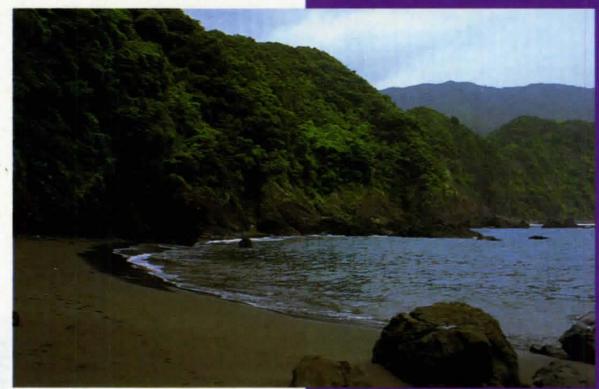
生物種の数が3000万種だとして、そのうちのたった1種が地球からいなくなるだけとはいって、自然界に存在する種のすべては、自然界の中で環境条件と深く結びついて存在しています。環境条件とは生活場所・棲息地で、動物の場合でいえば、大気や水だけでなく、食物連鎖の対象となる他の生物種や天敵まで含みます。種とは、たとえば「自然界において、または、自然状態で生殖的に隔離されており、生活している場所の生態系で一定の生態的位置を保っている、形質を同じくする個体群」と定義されています。ですから、動物園や植物園にだけ存在している生物は、もはや種として実存しているとはいえないでしょう。

「種」の減少は、将来の人類の資源にとって深刻な問題だと多くの研究者からも指摘されています。人類にとっての可能性が減り、地球の病気の進行を示し、死期が早まったというような思いです。

種の保護とは、個々の珍しい野生動物を保護することも当然含んでいますが、野生生物の種が維持・構成することで成り立っている自然の存在を守ることでもあるわけです。人間にとて有用な種だけ保護しようとしても、その種を取り巻く自然のバランスが狂って、地域生態系が破壊されたら……。自然の野生種の一つひとつは、どれほど遺伝子工学が進んでも人間が作り出すことはできません。そしてさらに、多様な種が進化史を経て形成してきた、精妙な自然界のバランスとその自然な歴史的変化は、いっそう回復不可能なのだということを、私たち人間は忘れてはならないのです。

(おばら ひでお・NACS-J 理事長、

聞きて NACS-J 編集部)



高知県高岡郡窪川町の海岸線。  
この付近で、今春カワウソのものと思われる足跡が見つかった。

’92 EARTH 新  
SUMMITへ

生き物たちのメッセージ  
シリーズ